

第1章 戦場

中国での戦い①

たこつぼでしのいだアメリカ機の爆撃

谷川 伸さんのお話から

○召集令状 人を軍に呼び集める命令書。赤色の紙を用いたので「赤紙」という。

○広島 日清戦争以降、近代的軍事都市として発展した。

○上海 表紙裏地図

○揚子江 今は「長江」と呼ぶのが主流。中華人民共和国の中部を東に流れて東シナ海に注ぐ大河。

○漢口 現在の武漢市の一部。表紙裏地図

○山砲 山地での使用に適するように、砲全体をいくつかに分解して運べるようにした大砲。

○江南せん滅作戦 揚子江（現長江）の右岸地域の中国軍を滅ぼし尽くそうとして、日本軍が昭和

私（じっさい）が実際に中国で体験した戦争のお話をしますので、戦争は何の得にもならないものなのだというのを改めてみなさんに考えていただきたいと思います。

私は、生まれつき体が丈夫（じょうぶ）ではなく、背も小さいので、軍隊には関係がないだろうと思っていました。ところが、戦況（せんきょう）が厳しくなると、私のようなひよろした人間も全部兵隊にとられるようになったのです。そして、昭和十六年（一九四一年）に一度旭川（あさひかわ）の部隊に行つて訓練を受けると、同じ年の七月、召集令状（しゅうしゅうれいじょう）の「赤紙」が私のところにも来りました。

旭川（あさひかわ）の部隊に入ると、軍隊のお医者さんが一人一人を裸にして調べ、戦場に連れていって使える者を選んでいきました。私は軍隊に入ることになりました。

旭川（あさひかわ）を出て汽車に乗って、広島（ひろしま）の港まで行きました。そして、広島で船に乗り、戦場に出発しました。私（わたし）たちを運ぶ船は御用船（ごようせん）という貨物船です。荷物を運ぶ船で、広い倉庫（くら）みたいなどころに五段（ごだん）ベッドをつくって、そこにびっしり兵隊（へいたい）が押し込まれました。

何日（なんにち）かかかって船（ふね）は上海（しやanghai）に着き、さらに小さい船（ふね）に乗りかえて、揚子江（ようすくわう）をさかのぼり、漢口（かんこう）に着きました。そして、漢口（かんこう）近くの部隊（へいたい）に私（わたし）たち新米（しんまい）の兵隊（へいたい）が配属（はいぞく）になり、いろいろと厳しい訓練（くんれん）を受けて、山砲（さんぱう）兵として戦場（せんじやう）に出されました。

最初（さいしょ）に行つた戦場（せんじやう）は揚子江（ようすくわう）の中流（ちゅうりゅう）付近（ふきん）で、江南せん滅作戦（めつさくせん）という戦争（せんそう）に参加（さんか）しました。その当時の戦争（せんそう）は、昼間（ひるま）に敵（てき）が見えるときだけ大砲（たいぱう）や鉄砲（てつぱう）を撃ち合（あ）い、夕暮（ゆふぐ）れになると終わりでした。そして、みんな陣地（じんち）に帰（かえ）って晩飯（ばんはん）をつくって食べて寝（ね）て、朝（あした）になったらまた起きて戦争（せんそう）

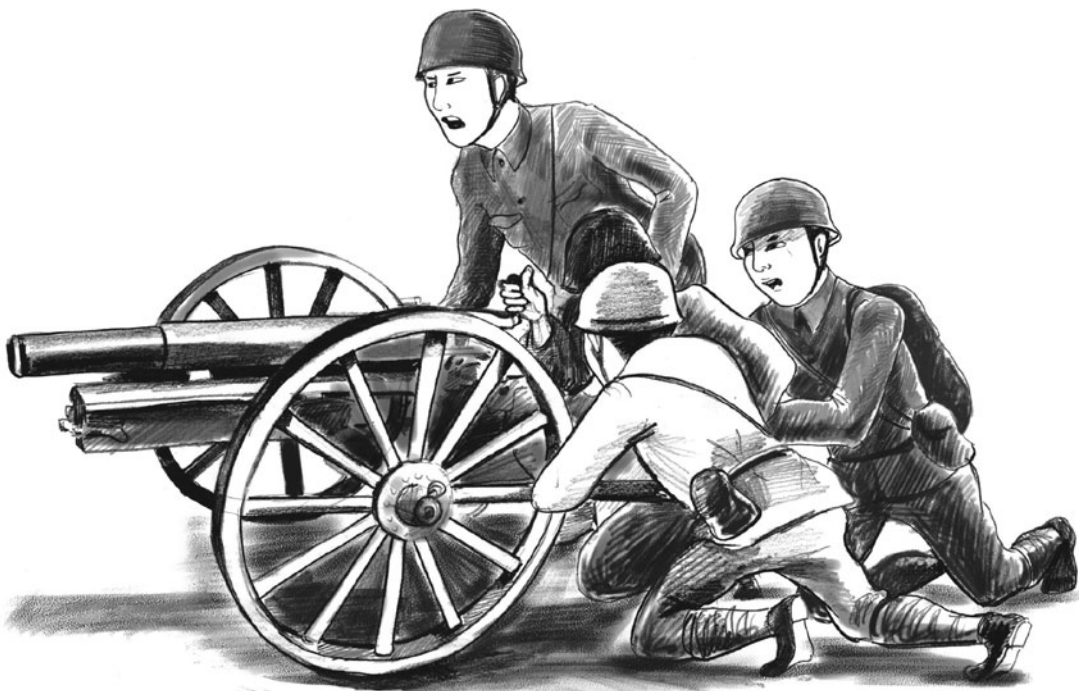
十八年（一九四三年）に実施した作戦。
 ○戦友 戦場とともに戦った仲間。
 ○機関銃 引き金を引いている間、自動的・連続的に弾丸が発射される銃。

をするのです。中国の軍隊も同じでした。

江南せん滅作戦の一回目のとき、初めて戦友の戦死にあいました。部隊が昼食を食べているときでした。突然、隠れていた敵から機関銃で撃たれました。見ると、私の隣にいた戦友が弾に当たって倒れているのです。即死でした。

戦死した人は、余裕があればその場で火葬して、お骨にしてまとめて隊長が持ち、あとで日本の家に送ります。しかし、いつもゆとりがあるとは限りません。私が最初の戦死者を見たときは、すぐ出発の号令がかかったので、急いで土をかけて仮の埋葬をしました。もちろんお骨を持っていきませんから、ご遺族に送るために小指を切り、隊長がそれを持って出発しました。

やがて大きな戦争になり、だんだんゆとりがなくなりました。戦死した戦友をその場に置いて進むとか、退却するということになりました。戦争というのは非常にむごたらしく、しかも、人情の薄い光景が繰り返される



イメージ図

山砲兵

たこつぼでしのいだアメリカ機の爆撃

場所だどつくづく感じました。

そのうちに、私たちが戦争をしている中国のもとと奥地おくちに、アメリカの飛行機がたくさん運ばれてきて、そこから飛び立って日本軍を爆撃ばくげきするようになってきました。夜になったらご飯を炊たいて食べて寝るといふようなゆとりがなくなりしました。地上の日本軍は、昼間はじっとしていて、夜になつてから動いて進んでいくという状態たいになりました。

昭和二十年の初めのころには、朝起きると私たちの頭の上にアメリカの飛行機が何機も飛ぶようになりました。そして、日本軍のいそやなところに爆弾ばくだんを落としたり銃撃じゅうげきを加えたりしました。私たちは、朝、目が覚めても手も足も出ません。前に進むこともできません。そのうちに、戦友はばたばたと倒たおれていきました。そこで、たこつぼというものを掘ほることにしました。たこつぼというのは、地面に掘ほったドラム缶かんのような穴あなのことです。兵隊が一人一つずつ穴あなを掘ほり、その穴あなに入って、頭に鉄かぶとをかぶってしゃがみます。そうすると、アメリカの飛行機に爆弾ばくだんを落とされても、何とかしのぐことができます。私たちはたこつぼを掘ほって、アメリカの飛行機が行ってしまうまでじっとしているのです。そういう毎日を繰り返く返かえしていまし

○ドラム缶かん 鉄板てつばんでつくった大型で太鼓型たいこがたの缶かん。



イメージ図

たこつぼの中の日本兵

○陣地 敵と交戦する目的で戦闘部隊が掘り所として攻撃や防御の準備・配置をした場所。
○降伏 戦いに負けたことを認めて、相手に従うこと。

た。

とうとう昭和二十年、終戦の日になりました。八月十五日、その日は中国でも大変天気がよくて、雲一つない晴れた空でした。ところが、昨日まで飛んでいたアメリカの飛行機が一機も来ないのです。おかしいなと思っていたら、向かいに陣地をつくっている中国軍から、「日本は降伏した。おまえらも降伏しろ。」と言ってきたのです。でも、私たちの上の人からはそういう通知も命令もない。最後まで戦うんだと、向こうから来た使いの人を追い返してやりました。

日本の軍隊は、肝心なことを兵隊に秘密にしていました。諸外国と降伏の交渉をしながら、私たちが兵隊には「進め、進め。勝っている。」と言っていたのです。ですから、私たちは日本が負けたことも知らなかったし、終戦になったことも全然知らなかったのです。結局、終戦の三日後の十八日に初めて日本軍が負けたということが伝わってきました。

私は戦争のことを考えたとき、私の隣で死んだあの戦友の死はいつたい何だったのだろうか、胸が痛むのです。そして、世の中の平和は、武力で勝つことではどうしても築くことではできないと思います。武力ではなく、むしろ、助け合いと話し合いで平和を築いていかなければならないと思うのです。

戦争は決して格好のいいものではありません。やるべきものではありません。私はそういうことを知って欲しくて自分の経験を見なさんにお話ししました。

DATA

平成21年度厚別区平和事業

聴き取り

- ・平成21年9月9日
- ・厚別北小学校



谷川 伸(たにがわ・しん)さん

- ・大正9年(1920年)生まれ
- ・札幌市厚別区在住